



現代の文学 = 38

吉行淳之介集



技巧的生活
團のなかの祝祭
風呂焚く男
驟雨
娼婦の部屋
原色の街
漂う部屋
街の底で

河出書房新社

現代の文学 38 吉行淳之介集

淳

© 1964

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和39年9月1日 初版印刷
昭和39年9月8日 初版発行

定価 390円

著者 吉行淳之介
発行者 河出孝雄
印刷者 高橋武夫
装帧 原弘(N.D.C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行者 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・岸田製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

技巧的生活	三
闇のなかの祝祭	一〇一
風呂焚く男	一六一
驟雨	一七三
娼婦の部屋	一九
原色の街	二〇七
漂う部屋	二八五

街の底で……………三九

年譜……………五七

解説……………進藤純孝…三二

挿画風間完
写真三木淳

吉行淳之介集

技巧的生活

一

暗くなつてから、にわかには珍らしい濃霧で、黄色いフォグ・ライトを点した自動車は、街路をのろろと走っていた。

少女は、青年と指先を絡み合わせたまま、歩道を歩いていた。日暮れ時から、二人は街を歩きまわっていた。歩いているあいだに、霧が立籠めたのだ。

歩きまわっているだけで、少女は愉しかった。まだ霧の立たない時刻に、一度だけ、青年は旅館の軒灯の前で立止まったが、少女が怪訝な顔で青年の顔を仰ぎ見たので、彼はすぐに歩き出した。

広い十字路で、二人は立止まった。信号灯の赤が、にじんて朧ろに見える。眼の前の道路が水の拡がりのように見えた。

「川岸に立っているようだわ」

「渡し舟が要るね」

「あたし、渡れない」

少女は後退みし、うしろに向き直った。歩道の傍に軒を並べている商店の灯が、黄色く連なっている。店構え

は、朧ろげに見分けられた。果物屋の店先に並んでいる林檎の赤が、眼に映ってきた。そのとき、男が言った。

「咽喉が乾いた」

「林檎を齧りましょう」

「え？」

「ここで待っていて」

少女は果物屋に歩み寄った。近付くにつれて、林檎の赤が光沢を帯びて眼に映ってきた。しかし、少女は緑色の林檎を探した。霧の中では、緑色の林檎を齧りたい、とおもったのだ。一つだけ買い、剥き出しのままの林檎を掴んだ片腕を深く曲げた。腕の前で、緑色の果実を捧げ持つ恰好になって、振返った。明るい店先から、暗い街路に向き直ったためか、霧は厚ぼったい幕のように見え、男の姿は無かった。

一時間ほど前、男が立止まったのは旅館の前だったことを、少女はにわかには鮮明に思い浮べた。置き去りにして、男は一人で何処かへ行ってしまった、と少女はおもった。

「洋一さん——」

絶叫して、霧の中に走り込んだ。

「葉子さん——」

声が聞え、青年の胸が、眼の前にあつた。烈しくその胸に突当り、弾き返される少女の軀を、青年は両腕で支

えた。

少女の軀は、青年の両腕の輪の中に入り、唇が合った。少女にとって、生れてはじめての接吻だった。五本の指でしっかり掴んで、胸の前で支えている緑色の林檎が、二人の胸のあいだで堅くぐりぐり動いた。

ふたたび、二人は歩き出し、街の裏側の方へしげんに足が向いた。

標識に似た白い板が、少女の眼の前で、斜めにかたむいて立っていた。突然のように、その白い板は少女の前にあらわれ、その上に記された文字がはっきり眼に映った。

立入禁止。

低い柵があり、その向うに平坦なひろがりがあった。

芝が植えられているようだ。大きな樹木の黒い影が、空に向ってそそり立っていた。

「入ろうか」

青年が誘った。少女は頷いて、低い柵をまたいだ。

少女は、平坦なひろがりの中の一つの点になった。それが、少女を頼りない気持ちにさせ、樹木の黒い影に向って歩いてみたが、その影は同じ大ききさで、すこしも近付いてこない。少女は立止まった。

「疲れたわ」

そのまま、芝生の上にくずくまった。青年も並んで腰

をおろし、その肩が少女の軀を押しした。少女は首をまわし、そこに青年のいるのを知った。頼りない気持ちが起り、地面にくずくまるまでの短かい時間、青年の存在が頭の中から消え去っていたことに、少女は気付いた。怪訝な気持ちになり、少女は確かめるように、傍の軀に軀を凭せかけた。

電車の走ってゆく音が、遠くの方で一しきり鳴り、やがて物音が聞えなくなった。しかし、静寂というのとは違う。半透明な静かさだ。霧が、単調な微かな音を立てつづけているようにもおもえる。

「なにか聞える？」

「なにも」

青年の手が、少女の膝頭に触れた。

「雨には音があるわね」

「地面に落ちるとき、音がするさ」

「それだけかしら。霧が流れるときは？」

「なにを考えているんだ」

青年の手が、膝頭の内側に移動しかかった。少女は咄嗟に堅く両脚を合わせ、その振舞いを咎められでもしたように、すぐに脚の力を脱いだ。

音が聞えてきた。短かい、しかし長く尾を曳く音が、単調に断続して鳴っている。厚い霧の幕の向うから、小さく聞えてくる。

「こーん、こーん。」

澄んだ、しかしうつろな音である。磨かれた木の板を、木槌で打つような音。いや、すこし違う。銭湯で、浴客たちが木の桶を使っている音に似ている。

少女は腿の内側に青年の掌を感じ、その音に心を委ねた。

音が消え、少女は青年の掌を、鋭く感じ取った。不意に、背後の闇のなかで、女の啜り泣きの声が聞えた。その声はしばらくつづき、男の音が混った。

「もう、子供はつくらないことにしようね」

女の背を撫でている男の手が眼に浮ぶような、宥める声音である。しかし、命令する口調も混っていた。

女の泣き声が高くなった。少女が軀を堅くしたとき、青年の手に烈しい力が籠もった。

二

「葉子、よう子さん、ね」

中年のマダムは、その名を舌の先で味わうように発音し、

「良い名前だけれど、同じよう子というひとがいるから、具合がわるいわ。そうね、あなたは、ゆみ子になさる。字は、好きなように自分で当て嵌めておけばいいわ」

「ゆみ子……」

女は口の中で、呟いてみた。酒場の女にふさわしいありふれた名が、なぜ誰にも使われないで残っていたのだろう。葉子という名で勤めたいとはおもっていなかったが、自分の名を剥ぎ取られた今、新しい名はよそよそしい顔で彼女の前にあった。彼女も、その名にたいして、よそよそしい顔を示した。その名前は、汗と脂と、そして涙にまみれているように見えた。

しかし、その名に馴染まなくてはならぬ。

霧の夜から二年間が過ぎて、葉子は酒場「銀の鞍」のゆみ子になった。

三

カウンターの隅に、電話機がある。眼鏡をかけた瘦せた男が、先刻からながと電話をかけていた。神経質そうな外貌に似合わず、受話器をもった手の肘をカウンターの上につき、軀を斜めに倒した姿勢で、大きな声を送話口におくりこんでいる。

註文の品を取りにきたゆみ子の耳に、その男の音が聞えてきた。

「いいか、待っているんだぞ。可愛がってやるからな」

他の店の馴染みの女に電話しているものとおもえた。得意気な、磊落を装った、周囲の耳を意識した声であ

る。ゆみ子は、パーテンの木岡の顔に、眼を走らせた。木岡は二十七、八歳か。青白い顔に、唇だけ異様に赤いが、口を堅く結ぶと頬から顎にかけて精悍な線が浮ぶ。その木岡の顔は、まったくの無表情であった。

眼鏡の男は、ようやく電話を切ると、パーテンに大きく片手を挙げ、出口に向って歩き出した。四、五歩あるいたところで立止まり、うしろに向くとゆっくりと大股で、木岡の方へ歩み寄った。大きく伸ばした右手の先を、握手を求める形にして、木岡の前に差出した。遊び馴れた鷹揚さを銜くはっているが、銜いそこなつて尊大な様子になつていた。そして、その喰い違いが、男にみじめな感じを与えている……、とゆみ子はその情景を眺めた。

もう一度、木岡の顔に、眼を向けた。彼はその男の掌を握っていたが、その手には力を籠めず、相変らずの無表情である。男に向けられた彼の眼は焦点を結ばず、男が手を離れた瞬間、木岡の眼は斜めに壁のほうに動き、つめたい嘲ける光を放った。

その光を見て、男は裁かれた、とゆみ子はおもつた。男の計算違いが招いているみじめさにたいしての同情は、まったく無かつた。

それでいいのだ、とゆみ子はむしろ爽快な気持で考えた。

新しい客が店に入ってくる度に、おもわずゆみ子は木岡の眼を窺つた。その客についての判断の手がかりを探ろうとする気持なのだが、その眼はいつも無表情であつた。顔は笑つても、眼だけは笑わない。無表情というのは、一つのはっきりした表情だということを、ゆみ子はいまさらのように感じた。

翌日の土曜日は、午後から雨になつた。

開店の時刻を一時間過ぎても、客は一人も入つてこなかつた。平素の半分ほどの人数しかいない女たちは、隅のテーブルに集まって、所在なげに雑談をしている。マダムも、まだ姿を見せていない。

「どうせ、今夜は暇だわね」

「ゆみ子さん、どう、すこしは馴れて」

「……………」

「そんなこと訊ねたって無理よ。まだ二日目だもの」

「あんた、この商売ははじめてなの」

「ええ」

「だったら、覚えておくといいわ。土曜日って、暇なのよ。気のきいた客は、気のきいた女の子を連れて、週末旅行に出かけてしまふのよ」

「雨も降つてるし、陰気できさくさするわ」

「そうだ、いいものがあるわ。きのう山ちゃんやまちゃんが置いていったテープでも聞こうかな」

るみという女が立上って、更衣室から小型のテーブルコーダーを持ってきた。山ちゃんと呼ばれたのは、肥って陽気な中年の客である。るみはイヤホンを耳に容れ、テープを回しはじめた。一瞬、緊張した表情が浮び、人目を意識して口もとだけ笑いで崩した。

「るみ、好きねえ」

そう言ったたえ子に、るみは黙ってもう一つのイヤホンを渡した。たえ子はすぐに耳に容れたが、

「厭ねえ、こんなに騒ぐものかしら」

「山ちゃんの話では、アパートの隣りの部屋のを、苦心して録音した、ということになってるけれど」

「怪しいものだわ。女ひとりだけで吹き込んでいるインチキなテープもあるという話だもの」

たえ子は耳からイヤホンをはずし、

「はい、よし子さん」

と手渡そうとしたが、よし子は掌をうしろに隠して受取らない。

「どうしたの」

「厭だわ。厭なことを思い出してしまったわ」

よし子は女たちの顔を見まわし、カウンターのの中の木岡を振り返って、

「知っているのは、木岡さんとあたしだけね」

「そうなんだ。もう二年になるからな。よう子さんは今

日休んでいるし。ゆみ子さん、きのうはママがいたから訊ねなかつたけれど……」

そこで言葉を切って、木岡はよし子と眼を合わせた。

「なんでしようか」

「その名前は、きみが考えたものなの」

「いいえ、ママが付けてくださったの」

「平仮名で、ゆみ子と書くわけだね」

「ええ、自分の好きな字を当て嵌めるように言ってくださいだったのですけど、仮名かなのまままで……」

「ママは、忘れてしまったのかしら」

よし子が、木岡に言った。ゆみ子は、苛立ちを覚え

た。

「なんのことでしよう」

「前に、ゆみ子というひとがいてね、自殺したんだ。二年前のことだが……」

「やはり雨降りで、暇な夜だったわ。ゆみちゃんがテープを聴いて、陽気に騒いでいたの。その夜中に、ガス管をくわえて死んでしまったのよ。木岡さん、あのときの

テープ、覚えていて」

「あれは本ものだった。力が入った、いいものだった」

テープに聴き入っているようにみえたるみが、イヤホンをはずし、

「なぜ、自殺したの」

「男に捨てられた、という話だったけど」

確信のない調子で、よし子が言った。

「そんなことで、いちいち死んでいたら、パーに勤めるような女のひとは一人もいなくなってしまうわ」

「そうね、みんな、なにかがあって、それで勤めるようになるのだものね」

「しかし、あのテープはいいものだった」

木岡が繰返して言い、

「なんというか、力が入っているくせに、やさしい気配なんだな。熱くなって、ゆっくり汗ばんでくる二つの軀が眼にみえるようだね。ああいうのを聴いたあとでは、ふっと死にたくなる気持も分る。ま、魔が射したんだな」

打切るように、木岡は言い、一瞬その眼が真剣な光を帯びた。しかし、すぐに元の皮肉な眼の色に戻った。客にたいするときには、木岡の眼は無表情、女たちの間では皮肉な色である。木岡は、揶揄する口調で、たえ子に言う。

「死ぬなら、ガスに限るよ」

「なぜ」

「小皺がみんな消えて、綺麗な顔になる。そうだったね、よし子さん」

「ええ……」

曖昧に、よし子は答えた。

「陰気な返事だなあ。それで、ゆみ子さん、名前はどうします。今なら、まだ変えられないものではない。ママには、よろしく言っておくよ。それとも、せめて適当な漢字を当て嵌めるか」

二年前、そのゆみ子という女は、男に捨てられ、そして、いのちと軀が光り耀いているようなテープを聴いた夜に、自殺したという。二年前の霧の夜のことを、ゆみ子は思い浮べた。あの頃は、自分のいのちも確かに光り耀いていた。しかし今は……。

「わたし、このままで構いません」
と、ゆみ子は答えた。

四

夕方、あと一時間も経てば「銀の鞍」のゆみ子になる筈の葉子は、鏡台に向って化粧していた。貧弱なアパートの、四畳半一間の部屋である。

ゆみ子になるためには、もうすこし口紅を濃くしなくてはいけないかしら、と彼女は鏡に顔を近寄せて、下唇を突き出してみた。そのとき、入口の戸をノックする音がした。

気ぜわしい叩き方で、そこに一種の親しみがあつた。新聞の集金人とかアパートの管理人の叩き方ではない。

長い間、このような叩き方で彼女の部屋のドアがノックされたことはなかった。

入口の戸が開き、次の瞬間、軽い身のこなしで若い女が部屋の中に立っていた。「銀の鞍」のよう子である。寒い冬の日で、ミンクのストールがよう子の肩を覆っている。

よう子は立ったまま、部屋の中を見まわすと、かろく厩根を寄せた。

「前のゆみ子さんも、こんな部屋に住んでいたわ」

黄色く陽に焼けた畳に、じかに置いてある新式の電気湯沸器が、かえって部屋の貧しさを際立たせている。

「でも……」

「悪気と言ったのじゃなくつてよ。身もちの良いのはよく分るわ。でも、そういうひとは、自分で自分を追い込んでしまうことが、よくあるのよ。それを心配したの。前のゆみ子さんがそうだった」

「……………」

「出掛けましょう。通りがかったので、誘いに寄ったのよ」

アパートの前に、クリーム色の自動車が駐めてあった。よう子がハンドルを握った。彼女は、派手な運転をした。追い抜かれたタクシーの若い運転手が腹を立てて、抜き返した。左へわざと切り込んでよう子の車の前

に出ると、軽くブレーキを踏んで威嚇した。前の車の後部が眼の前に迫り、あわててブレーキを踏んだよう子の赤い唇から、

「畜生！」

という言葉が出た。

「ねえ、前のゆみ子さんの話をして」

ゆみ子は、よう子の気持を逸らそうと試みたのだ。

「前のゆみ子、馬鹿な女よ。男に捨てられて、そのことばかり考えて……」

「純情だったのね」

「純情？ 純情って、どんなことかよく分ないけど……」

よう子は、前を向いたまま、唇を歪めた。

「とにかく、計算はしていたのよ。幸福になろうとする計算を。ただ、その計算の仕方が間違っていたんだわ。馬鹿な女なのよ」

赤信号で、交叉点に停った。ゆみ子が何気なく横を向くと、並んで停っているライトバンが眼にとまった。中年の男がハンドルを握っている。黒い縁の眼鏡をかけ、

暢気な顔つきである。実直だが小心ではなさそうに見える。その傍にはよく肥った三十くらいの女。一見して、

その男の妻と分る。三歳くらいの男の子が座席に立ち、

両方の掌を窓ガラスに当てて、外を見ている。女の手が

その子の胴に巻きつき、支えている。うしろの座席には、男女とり混ぜ五人の子供がいる。八歳くらいから四歳くらいまでの子供たちで、左右うしろの窓ガラスにそれぞれ貼り付いて、街の景色を眺めている。

合計六人、年子とみえた。

よう子の肩をつついて、注意を促した。ゆみ子の示す方を見たよう子は、顔を歪めた。薄いすべすべした皮膚の額に、痲性な皺が寄った。その皺を無視して、ゆみ子が言った。

「あの子たち、虫籠に入っているコオロギみたいじゃなくって」

「窮屈そうだわね」

そういう意味で言ったのではない、とゆみ子はおもう。子供の頃、縁日へ行つて竹の籠に虫を何匹も入れてもらう。眼の高さに持ち上げた籠を、街の光に透かして見ながら、家へ持つて帰る。良い声で鳴くだろうか、という微かな不安がかえつて嬉しい。そのときの気持を、ゆみ子は思い出していた。

「でも、幸福そうだわ」

「だから計算が違ふというのよ」

咎める、鋭い声である。

「そんなこと言っていると、前のゆみ子と同じになってしまうわ。あれは、別の世界のことよ」

すこし間を置いて、よう子は吐き出すように言った。
「よくもまあ、倦きずにたくさん産んだものね」

五

「銀の鞍」の入口には、「メンバーズ・オンリー」という横文字の札が掲げられている。クラブ員以外は入店お断わり、ということは、当店では勘定は高額になります、お入りの方はその覚悟でいてください、という意味と受取っておけばよい。一流店の標識であるが、スタン・バーのつもりで気易く入って、会計のとき悶着が起らぬための警告板の役目も果しているわけだ。

したがって、客の大部分は中年以上の紳士である。

その夜、珍しく二十八、九歳の青年が二人連れ立って入ってきた。ときおり現れる顔とみえて、女たちと馴々しく話し合っている。マダムは、その客に負担をかけた心づかいを示して、

「わたしたちは、おビールでもいただけましょう」

と、グラスを運ばせた。

嫌われている客ではない。その席から、女たちの笑い声がしばしば起った。よう子もその席にいて、軽妙な会話を愉しんでいる様子だ。ゆみ子は隣りの席にいて、よう子の顔を眺めていた。その顔は、なめらかに白く、疲労をすこしも隠ませていない。小柄で細身の軀だが、そ

の軀にはしなやかで強靱な細胞が詰まっている。ときおりその小鼻が膨らんで、自信と気負いを感じさせた。

「よう子さん、今夜わたしに送らせていただけますか」

青年の一人が、切口上で言った。わざと切口上で言っていることを示じている口調で、そのことで照れくささを誤魔かしている。その口調の芯には、なまなましい願望が潜んでいることが分る。

「ええ、いいわ」

気軽に、よう子が答えている。

「よう子さん、あなたは素晴らしい。ぼくのこれからの一年間を、あなたに捧げます」

青年は道化た口調で言った。露骨な喜びが透けてみえたが、悪い感じではなかった。

「あら、一年だけしか捧げてくれないの」

「あなたも、いろいろお忙しいでしょうから」

「よう子さん、あなたは、ほんとうに素晴らしい」

もう一人の青年が、オペラ歌手の口調を真似て言った。

「よう子さん、ぼくをあなたに捧げます。ぼくを十分に養ってください」

青年が、同じ口調であとをつづけた。

「まあ、ずうずうしい。でも、自分のことがよく分っているだけ感心だわ。だけど、どの部分を養ってあげれば

らうの」

「もとでをかけずに、養える部分で結構です。あなたが自前でできる部分で、結構です」

そして、一座に陽気な笑い声が上がった。

しばらく経って、ゆみ子が化粧室へ行くと、鏡の前でよう子が化粧を直していた。

「おもしろい人たちね」

「若い割には、出来のいいほうだわ。ママは、息抜きになつていい、と言っているけれど……」

「一緒に帰るのでしょ」

「暇だったらね。坊やのくせに図々しいから、かならず言い寄ってくるわ」

「こわくなくって」

「こわい？」

よう子は笑い声をたて、驕慢な眼になった。

「釣っておいて、十分引きつけてから、体をかわすのよ。かっかとなったままで、放つぱり出してやるのよ。今夜はどの手を使うことにしようかな」

「可哀そうだわ」

「あなた、男に欺されたんでしょ」

よう子に、身上話をしたことはない。

「懲りないのね、今度は欺してやる番じゃないの。だいいち、ろくにお金を持たずに遊ぼうなんて、失礼だ